

墓誌から見た中国北朝時代の民族融合

—— 司馬金龍家族墓誌を手がかりとして ——

張 学 鋒

—

内藤湖南博士は、文化史観的視点から前近代の中国史を古代（上古）・中世・近世の三段階に区分し、魏晉南北朝隋唐時代を中国史上の中世に当たるとされた⁽¹⁾。

それぞれの時代には、必ず異なった時代的特徴がある。内藤博士の説によれば、中国古代とは中国固有の文化が発生・発展し、繁栄に至った時期である。秦漢以後、中原の文化は外にむかって拡張し続け、周辺民族の覚醒を促した。「中世」になると、中原文化の薫陶を長期間にわたって受けてきた周辺民族が覚醒しはじめ、徐々に成長するとともに中原を虎視眈々と窺い、民族勃興期の強大な軍事的活力を借りて一気に進軍し、中国文化の中心地である中原に攻め込み、西晋王朝を一挙に滅ぼした。戦乱によって大量の人口移動が起こり、先秦時代以来蓄積されてきた中国の伝統文化は、江南地域において保存・発展するに至ったのである。中原に入り込んだ主要な民族——匈奴・鮮卑・羯・氐・羌は、互いに攻め合い、王や皇帝を自称し、前趙（匈奴の劉氏）・後趙（羯人の石氏）・前涼（西晋の涼州刺史、漢人の張氏）・後涼（氐人の呂氏）・南涼（鮮卑の秃髮氏）・北涼（匈奴の沮渠氏）・西涼（漢人の李氏）・前燕（鮮卑の慕容氏）・後燕（鮮卑の慕容氏）・南燕（鮮卑の慕容氏）・北燕（鮮卑化漢人の馮氏）・前秦（氐人の苻氏）・後秦（羌人の姚氏）・西秦（鮮卑の乞伏氏）・夏（匈奴の赫連氏）・成漢（氐人の李氏）等、少なくとも十六の政権を相次いで樹立した。歴史上「五胡乱華」と称されるこの一世紀近い混戦状態を収束させ、華北を再統一したのが、鮮卑拓跋部の建てた北魏王朝である。

周辺民族が間断なく流入するにつれて中原地域の民族構成も複雑化していった。各民族の交流・接触が継続する中、戦争の他、民族間の相互融合がこの時代の主旋律となった。300年近く続いた発展を経て、全く新しい民族意識が徐々に形成されていった。そしてこの民族こそが、のちに燦然と輝く隋唐文化の創造者に他ならないのである。

五胡十六国～北朝時代にかけての民族融合問題については、先行研究においても極めて重大な関心が寄せられてきた。しかしながら、多くの研究では、北魏孝文帝の漢化政策、すなわち、鮮卑語の使用禁止と漢語の使用、鮮卑服の禁止と漢服の着用、漢人との通婚奨励、中原の貴族制度

を模倣した鮮卑氏姓の改訂などに焦点が絞られがちであり、これらがこの時期の民族融合問題を見当するためのキーワードとなるとともに、漢文化の立場からは極めて高い評価が与えられてきた。

民族融合という問題において、孝文帝の施行した漢化政策はもとより重要であるが、これは歴史的発展の趨勢に順応した一種の政策制度に過ぎない。しかし、民族の融合は長期間にわたる日常的なものである。したがって、細部の検討に乏しい研究は、結局のところ観念の域にとどまってしまうことを免れない。本稿は、近数十年間に出土した司馬金龍の家族に関連する墓誌を手がかりに、個別の事例分析を通して、五胡十六国～北朝時代の民族融合問題について考察を加えるものである。

二

司馬金龍夫妻の合葬墓は、山西省大同市の東南約 6.5km、石家寨村の西南にあり、1965 年、現地の農民が井戸を掘削した際に偶然に発見されたものである。文物局はただちに緊急の発掘調査を行い、翌年、発掘作業はほぼ終了、発掘報告が『文物』1972 年第 3 期に発表された⁽²⁾。

司馬金龍は、北魏孝文帝の太和 8 年（484 年）に死去した。当時、孝文帝の所謂「漢化政策」はまだ施行されていなかったが、墓葬の中の副葬品には、すでに胡漢融合の風潮が鮮明に反映されている。墓葬の中から発見された 5 幅の漆の屏風は比較的残存状態がよく、高さはそれぞれ約 80cm ある。この高さは、当時の人々が（日本の伝統家屋での暮らしのように）床の上に座って生活をしていたことを反映している。屏風の両面には絵が描かれ、全体に朱漆が塗られており、4 段に分かれた絵には、帝王・忠臣・孝子・列女・高士・賢人などの人物の故事が描かれており、いずれの図幅にも題記と標題がある（図 1）。屏風の漆絵に表現された画風は、東晋の顧愷之が描いた『女史箴図』や『列女仁智図卷』など伝世の絵画作品との共通点が多く⁽³⁾、純粋な漢文化の風格をもつ作品と言ってよい。一方で、司馬金龍墓からは大量の陶俑が出土している。発掘報告によれば、顔の彫りが深く鼻の高い胡人風の黒髭を蓄えた胡俑を除いては、男俑は様に風帽と外套を身にまとい、細い袖の長衣を着て、帯を腰の下で結び、女俑は斜め襟で細い袖の長衣あるいは長袍を身に着けている。これらはすべて典型的な遊牧民族のスタイルである。



図 1 司馬金龍墓出土漆屏風画

司馬金龍の墓から出土した漆屏風の絵画と陶俑は、胡

漢文化の特徴をそれぞれ反映したものであるが、これとほぼ同時期の寧夏回族自治区固原市の北魏墓から出土した木棺に描かれた漆絵⁽⁴⁾には、何種類もの文化的要素が表現されている(図2)。この漆絵は、前方が高く幅広で後方が低く幅の狭い鮮卑式の木棺の上に描かれている。漆絵の主要なモチーフは中原地方の歴史物語であり、それぞれの場面には傍らに

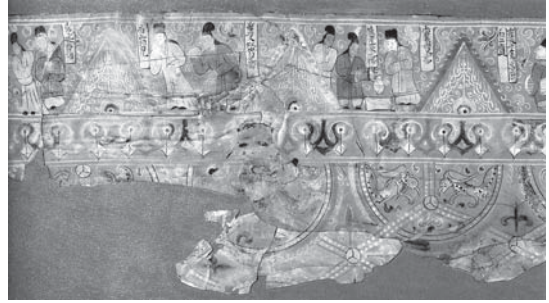


図2 寧夏固原北魏墓出土木棺漆絵

漢字で表題が書かれている。この点では司馬金龍墓から出土した漆屏風画と同様である。しかし、物語の主人公の衣装が漢服であることを除き、大多数は典型的な鮮卑服を着ており、斜め襟の袍服で長さは膝下、その下には裙(スカート)か袴を穿いており、頭には風帽を被っている。漆絵の場面は三角形の火炎紋で区切られており、下方には連珠紋の団花図案(花を描いた丸い図案)で装飾されている。三角形の火炎紋は、図像学上、中央アジアの祆教(ゾロアスター教)の影響を受けたものと見るのが普通であり、連珠紋の団花図案はペルシャ文化の重要な意匠である。したがって、固原市の北魏漆棺画は、中原・鮮卑・中央アジアなどの各種の文化要素の組み合わせられたものである。これは単に胡漢文化の交流の結果であるのみならず、胡漢・東西文化の相互交流の産物である。五胡十六国時代の戦争・交流を経て北魏前期になると、胡漢・東西の交流はすでに前代には見られないほど盛況を呈していた。文化交流の隆盛は、人間が往来して相互に意識し、互いに取り入れた結果に相違なく、次に紹介する司馬金龍の家族に関連する6点の墓誌に記載された内容は、まさにこの時期の胡漢の通婚・民族融合のありさまを具体的に示す事例であると言える。

三

司馬金龍夫妻墓からは全部で3点の墓誌が出土しており、うち2点は司馬金龍の墓誌、もう1点は司馬金龍の第一夫人、欽文姬辰の墓銘である。

1. 司空瑯琊康王の墓表

本墓誌の題は「墓表」となっており、墓門のアーチの頂上部に嵌め込まれていた。碑の形状をしており、全体の高さは64.2cm、幅は14.4cmである。墓表は早期の墓誌に多く見られる碑の形式を留めており、北魏の洛陽遷都以後に盛行した有蓋の方形墓誌とは大きく異なる(図3)。墓表の内容は以下の通りである。

司空瑯琊康王墓表

維大代太和八年歲在甲子十一月庚午朔十六日乙酉、代故河内郡温県肥郷孝敬里、使持節・侍中・鎮西大將軍・吏部尚書・羽真・司空・冀州刺史・瑯琊康王司馬金龍之銘。

2. 司馬金龍の墓銘

これも碑の形状をしており、後室の甬道の南端の東側から出土した。全体の高さは71cm、幅は56cmである。記された内容は「墓表」とほぼ同じである。



図3 司馬金龍墓表

大代太和八年歲在甲子十一月庚午朔十六日

乙酉、懷州河内郡温県肥郷孝敬里、使持節・侍中・鎮西大將軍・吏部尚書・羽真・司空・冀州刺史・瑯琊康王司馬金龍之銘。

3. 司馬金龍の第一夫人欽文姬辰の墓銘

後室の甬道の南端の東側から出土した。形状は方形に近く、長さ30cm、幅28cmである。両面に文字が刻まれており、その内容は以下の通りである。

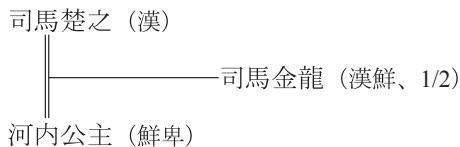
維大代延興四年歲在甲寅十一月戊辰朔二十七日甲午、河内温県倍郷孝敬里人、使持節・侍中・鎮西大將軍・開府儀同三司・都督梁益兗豫諸軍事・護南蛮校尉・揚州刺史・羽真・瑯琊貞王司馬楚之子、使持節・侍中・鎮西大將軍・朔州刺史・羽真・瑯琊王金龍妻、侍中・太尉・隴西王・直勲賀豆跋女、乞伏文照王外孫女欽文姬辰之銘。

墓誌の内容に依拠し、歴史文献の記載と合わせれば、司馬金龍の身分は明白である。河内郡温県肥郷孝敬里の司馬氏の家族は、後漢時代には「世二千石（代々郡太守を輩出する）」の大家族であり、著名な人物としては、後漢の潁川太守司馬潁・京兆尹司馬防などがいる⁽⁵⁾。司馬氏は礼制研究を家学とし、早くから教養化した豪族の道を歩み始め、中国中世貴族の一員となった。3世紀から4世紀までに、中原の漢人社会において、すでに門閥・血統に基づいた貴族の身分を確立し、彼らは政治・社会・文化などの各方面を独占した。毛漢光氏の統計によれば、全国レベルにおける第一流の貴族は13姓17家あり、河内の司馬氏もそうした貴族のひとつであった⁽⁶⁾。曹魏時代、司馬懿が国政に参画し、徐々に軍政の大権を掌握し、息子の司馬昭・司馬師の時代に及び、曹魏の皇帝はすでに司馬氏の傀儡となり果てた。265年、司馬懿の孫司馬炎は魏帝より禪譲を受け、西晋王朝を樹立した。しかしながら、晋朝は建国から僅か半世紀で内乱と外患の二重苦に苛まれて瓦解し、中原は再び戦乱状態に陥った。宗室の瑯琊王司馬睿は門閥貴族の支持を得

て、建康（現在の南京）に東晋王朝を樹立した。

5世紀の初め、東晋王朝は再度、権臣による政權篡奪の事態に直面した。420年、劉裕が司馬氏に代わって劉宋王朝を樹立し、歴史は南朝時代に突入する。東晋滅亡の前年にあたる419年、宗室の一員であった司馬楚之は、江南から平城へ逃れ、北魏王朝に亡命した。『魏書』司馬楚之伝の記載によれば、北魏に亡命後の司馬楚之は「仮節・侍中・鎮西大將軍・開府儀同三司・雲中鎮將軍・朔州刺史」の官職を拝命し⁽⁷⁾、瑯琊郡王に封ぜられ、死後は金陵（金陵とは北魏前期の皇帝陵の総称。現在の山西省左雲県一帯）に陪葬されたという。そればかりか、鮮卑政權に亡命した司馬楚之は鮮卑貴族と通婚し、王女の河内公主を娶って妻となし、漢族と鮮卑族の混血児である司馬金龍を生んだ。したがって、司馬金龍の身体には漢人の血が1/2流れている（以下に示す家系図において、括弧の中の漢字は民族を、アラビア数字は漢人の血統の割合を、漢数字は鮮卑人の血統の割合をそれぞれ示す）。

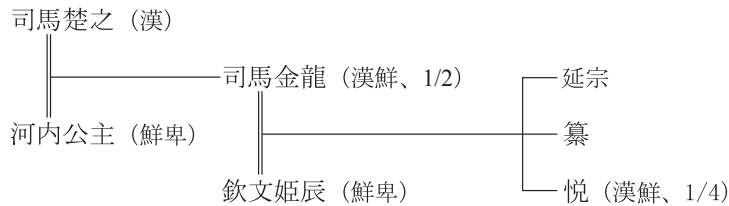
〔系図 1〕



司馬金龍の第一夫人は鮮卑族の欽文姫辰である。『魏書』司馬金龍伝および出土した欽文姫辰墓誌銘の記載によると、欽文姫辰は太尉隴西王源賀の息女であり、また鮮卑族の乞伏文照（昭）王（直勲賀豆跋の岳父）の外孫女であった。源氏は鮮卑秃髮部の子孫であり、五胡十六国時代にその祖である秃髮烏孤が河西に南涼を建国し、三代後の秃髮傴檀の時代に鮮卑乞伏部の建てた西秦によって滅ぼされた。源賀は秃髮傴檀の息子であり、後に北魏太武帝に帰順した。欽文姫辰墓誌銘では、彼女の父「源賀」を「直勲賀豆跋」と記している。「直勲」とは鮮卑語で「貴人」の意味であり、「只斤」と記すこともあり、特に王子或は北魏皇帝の子弟を指す言葉である。「賀豆跋」とは「源賀」であるから、「豆跋」は「秃髮」の別表記と見て間違いはない。孝文帝が漢化改革を推進した際、北魏皇室は「拓跋」の姓を「元」とし、「拓跋」と同源の「秃髮」には源氏の姓を賜った⁽⁹⁾。墓誌から明らかのように、欽文姫辰墓銘が刻されたのは北魏延興4年（474年）であり、これは「漢化政策」が推進される前のことである。『魏書』が編纂されたのは漢化以後のことであるから、両者の間には氏名表記上の相違が存するわけである。

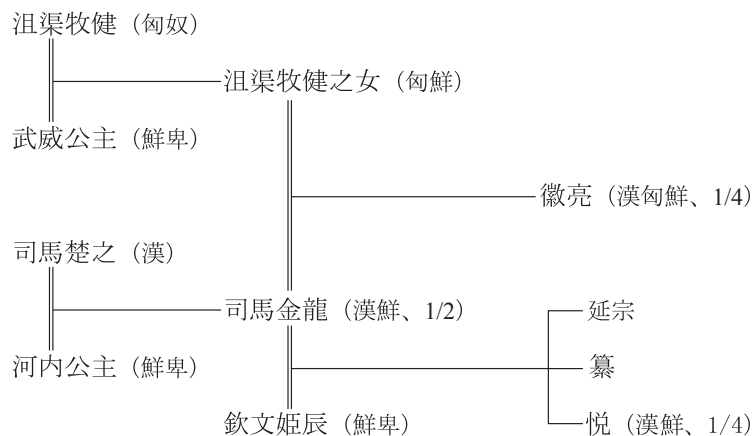
司馬金龍と欽文姫辰夫婦から司馬延宗・司馬纂・司馬悦の三子が生まれたが、彼らの身体に流れる漢族の血統は1/4だけとなった。

〔系図 2〕



延興 4 年（474 年）、司馬金龍の第一夫人欽文姫辰が世を去ると、司馬金龍は程なく沮渠牧犍の息女を妻とし、司馬徽亮が生まれた。沮渠氏は匈奴に属し、五胡十六国から北魏前期において河西に北涼政権を樹立し、沮渠牧犍は二代目の北涼王である⁽¹⁰⁾。沮渠牧犍は北魏太武帝の妹武威公主を娶り、そこに生まれた女子が司馬金龍の第二夫人となった（鮮卑・匈奴の混血）。司馬楚之が北魏に亡命してから後、楚之・金龍父子は相前後して鮮卑拓跋氏・鮮卑秃髮氏・匈奴沮渠氏と通婚し、司馬金龍の諸子に流れるの漢族の血統は四分の一に過ぎなくなった。このうち、司馬延宗・纂・悦は漢族と鮮卑族（拓跋、秃髮、乞伏）の混血で、司馬徽亮は漢・匈奴・鮮卑の 3 民族の混血児である。

〔系図 3〕



太和 8 年（484 年）、司馬金龍は世を去り、北魏の国都平城（現在の大同）に葬られた。民族融合の歴史の流れはその後にも止まることなく進み続けたが、司馬金龍の子孫の墓誌はこのことを生き生きと証明している。現在知られている司馬金龍の家族と関係のある墓誌には、以下の数種がある。

4. 司馬悦墓誌⁽¹¹⁾（司馬金龍の第三子。河南孟県出土）

墓誌は、「魏故持節督豫州諸軍事征虜將軍漁陽県開国子豫州刺史司馬悦墓誌」と題されており、



図4 司馬悦墓誌

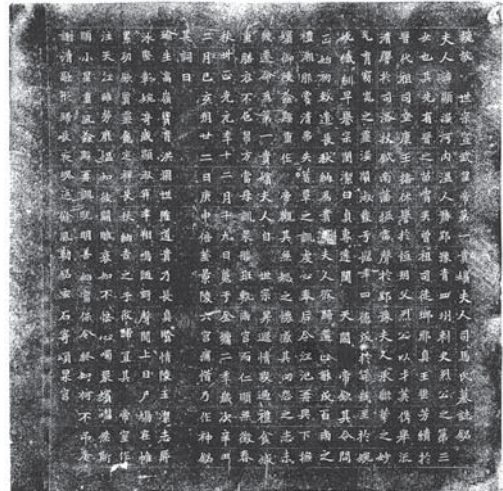


図5 司馬顗姿墓誌

永平4年(511年)に葬られた。墓誌の冒頭には、「君、諱は悦、字は慶宗、司州河内温県都郷孝敬里の人なり。故侍中・征南大將軍・開府儀同三司貞王の孫、故侍中・開府儀同三司・吏部尚書・司空公・康王の第三子なり。……」(図4)と記されており、墓誌の主は司馬金龍の第三子、司馬悦であると分かる。墓誌には司馬悦の配偶者について記されておらず、ただ「男は懿主を降し、女は貴嬪に^{しる}徽す」とある。これは、司馬悦の子女が帝室と婚姻し、親戚関係にあったことを意味している。

5. 司馬顗姿墓誌(司馬悦の第三女)

司馬顗姿は司馬悦の第三女であり、北魏の世宗(宣武帝・元恪)の第一貴嬪となり、正光元年(520年)に世を去り、翌年、景陵に陪葬された⁽¹²⁾。墓誌は「魏故世宗宣武帝第一貴嬪司馬氏墓誌銘」と題されており、墓誌の冒頭には、「夫人、諱は顗姿、河内温の人なり。豫鄆豫青四州刺史・烈公の第三女なり。其の先は有晋の苗胄なり。曾祖の司徒瑯琊真王、芳迹を晋代に垂れ、祖の司空康王、休^{あま}誉を恒朔に播ねくす。父の烈公、才英俊なるを以て挙げられ、清誉を司洛に流す……」(図5)とある。

6. 高雅墓誌

河北省景県は五胡十六国～北朝時代においては渤海郡蓨県であり、渤海高氏の本籍地であった。渤海の高氏は、清河の崔氏・滎陽の鄭氏・趙郡の李氏・范陽の盧氏のような一流の名門貴族には及ばぬものの、崔・李・盧・鄭氏と通婚することができ、当時の社会ではなお名望ある貴族であっ

と言える。高氏の家族墓地は、現在の景县城の南 15km の野林荘と北屯郷の一帯に位置し、現地では「高氏祖墳」或いは「皇姑墳」と呼ばれている。1970 年代に緊急の発掘調査を行ったが、そのうち M13 の番号を与えられたのが高雅の墓であり、東魏の天平 4 年（537 年）に葬られた⁽¹³⁾。

高雅墓の墓葬はやや特殊であり、甬道・主室と東・北両側室から構成されている。主室には高雅と夫人の司馬顕明が葬られており、北側室には高雅の次子高德雲、東側室には高雅の長女、北魏孝明帝の嬪妃、高元儀が埋葬されている。出土した墓誌には、墓誌の表面に高雅の生前の事績を刻み、墓誌の側面には「夫人は河内瑯琊王司馬金龍の孫、豫州刺史悦の長女、字は顕明、年四十九なり。大女は孝明皇帝の嬪、字は元儀、年卅二なり。第二息、鎮東府騎兵參軍、諱は德雲、字は仲武、年廿一なり」と刻まれている（図 6）。

司馬楚之・司馬金龍父子の墓葬はいずれも平城附近にあるが、司馬悦の墓葬は洛陽附近の孟県、即ち司馬氏の故郷にある。これは孝文帝の漢化政策の結果であり、当時の規定に従えば「代人は平城に帰葬するを得」なかったのである。景高 M13 の番号を附されたのが高雅夫妻合葬墓で、東魏天平 4 年（537 年）に葬られた。出土墓誌の記載によれば、主室に葬られたのは、墓の主人高雅とその妻司馬顕明である。司馬顕明は司馬悦の長女、司馬金龍の孫女である。渤海高氏は「天下貴族」の十三姓の一つであり、このような形式で鮮卑の血脈は、他の世襲名門の漢人貴族の体内に流れ込んでいった。



図 6 高雅墓誌（側面）

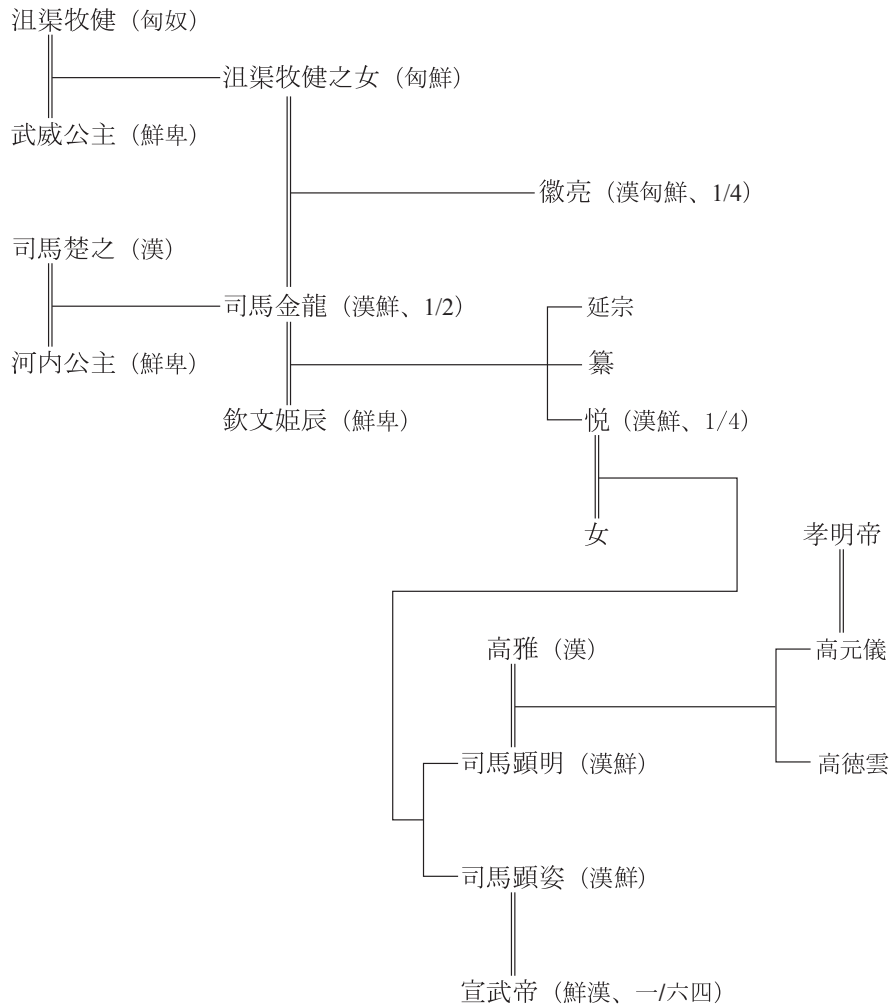
四

北魏献文帝（拓跋弘。在位 465～471 年）から、北魏政府はさらに改革を一步前進させようとする基本方針政策が現れ始めた。文成帝（拓跋濬。在位 452～465 年）の皇后馮氏（馮太后、即ち文明太后、北燕宗室の出身）は、孫の孝文帝（拓跋宏。在位 471～499 年）が即位した当初にあっては臨朝称制し、三長制・均田制といった一連の改革政策を制定、実行した。孝文帝は親政の後、太和 18 年（494 年）に平城から中原文化の中心地である洛陽へと国都を遷し、制度改革の内容はさらに深く掘り下げられた。胡服の変革・鮮卑語の禁止・貫籍と度量衡の制定、族姓の制定、胡漢の通婚、姓氏・官制礼制の改革等々、漢族と北方周辺民族との融合はさらに一步促進された。

実際、民族の融合は、司馬金龍ら貴族のみならず、北魏帝室においても顕著であった。北魏前期には、所謂「子貴なれば母死す」の規定があり、多くの鮮卑女性は自分の息子が太子となって

自分が殺されることを望まず、ために北魏皇帝の母親は大部分が漢人出身であり、結果として漢人の血統が北魏帝室に速やかに流れ込むこととなった。有名な孝文帝を例にとれば、彼の身体に流れる鮮卑の血統は多く見積もっても 1/32 に過ぎず、その他の帝室構成員における漢族の血統もこれと大差ない。司馬悦の息女司馬顕姿は、孝文帝の息子である宣武帝の第一貴嬪となったが、宣武帝に流れる鮮卑人の血統はわずかに 1/64 である。

〔系図 4〕



孝文帝は社会発展の必要に応じ、政治権力を利用して社会の各方面で改革を進め、鮮卑民族の文明化のプロセスを大いに進展させた。しかし、その改革は深刻な副作用を伴った。即ち鮮卑民族の消滅である。ほどなくして朝廷の「漢化政策」への不満と貴族官僚の腐敗により、北部辺境の六鎮に駐屯していた鮮卑の城民が叛乱を起こした。この動乱によって北魏政権が分裂して東魏と西魏になり、またほどなくしてそれぞれ北齊高氏と北周宇文氏に取って代わられた。鮮卑文化

は北齊・北周兩政權下で復興した時期があったけれども、それはあくまでも一時的な現象であって、「漢化」の歴史の波が後戻りすることはなかった。577年、北周が北齊を滅ぼし、4年後、楊堅が北周に取って代わり隋朝を建てた。589年、隋文帝楊堅は晋王楊広に命じ軍を率いて南下させ、陳朝を平定した。ここにおいて4世紀余りの間分裂していた中国は再び統一され、中国史は隋唐時代を迎えることとなった。

従来の研究では、北魏孝文帝の「漢化政策」に対して特に高い評価を与えるものがほとんどであった。しかし司馬金龍の家族の墓誌の分析を通じて、北朝時代における民族間での交わりとは、決して単純な「漢化」ではなく、民族間での相互の交わりであり、即ち所謂「民族の融合」であることが明らかとなった。北朝時代における民族の大融合によって、隋唐以後、五胡十六国時代以来一世を風靡した鮮卑・匈奴・羯・氐・羌の諸族は、単独の民族としてはすでに歴史の表舞台から去っていくこととなった。しかし、彼らの影響はこれによって消失したわけでは決していない。むしろ、これまでとは違った形式で活躍し、当時の政治を直接的に左右することすらあったと言えるのである。隋唐の帝室はそれぞれ弘農楊氏と隴西李氏の後裔と自称しているが、普六茹・大野といった鮮卑の姓氏を有している。そして、独孤氏・長孫氏・蕭氏などの各民族は、いずれもその通婚の対象となった。彼らの身体の中には、間違いなく漢族、鮮卑族、さらにはその他の各民族の血統が流れている。一方、当時の所謂「漢人」ももはや漢代の漢人ではなく、「中国文化」もすでに秦漢時代の中国文化ではなかった。多民族の混血を経た新時代の中国人——隋唐人は、当時最も先進的な隋唐歴史文化の創出者となった。司馬金龍父子以下、数世代の経歴は、まさにこの歴史の一大潮流の縮図に他ならないのである。

(溝口 瑛 訳、辻 正博校閲)

《校閲者附記》

本稿は、2014年12月4日開催の「人間・環境学研究科第52回国際交流セミナー」における張学鋒氏の講演「墓誌から見た中国北朝時代の民族融合——司馬金龍家族墓誌を手がかりとして——」のもととなった中文原稿に対して張氏自身が加筆修正した文章の日本語訳である。日本語訳に際しては、本研究科博士後期課程在学の溝口 瑛さんの手を煩わせ、辻が校閲を行った。

注

※正史の引用ページ数は、いずれも中華書局標点本による。

- (1) 内藤湖南「支那上古史」(『内藤湖南全集』第十卷、筑摩書房、1969年所収)。
- (2) 大同市博物館・山西省文物工作委员会「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」(『文物』1972年第3期)。
- (3) 張麗「北魏司馬金龍墓屏風漆画研究」(『河南科技大学学報』2005年第3期)を参照。
- (4) 寧夏固原博物館『固原北魏墓漆棺画』(寧夏人民出版社、1988年)。著者は、当該墓の年代を太和10年(486年)前後のものと推測している(15頁)。

- (5) 『晋書』卷一、宣帝本紀、1頁。
- (6) 毛漢光『中国中古社会史論』（上海世紀出版集団、2002年）を参照。
- (7) 『魏書』卷三七、司馬楚之伝、857頁。
- (8) 『晋書』卷一二六、禿髮烏孤載記、禿髮儁欽載記。
- (9) 『魏書』卷四一、源賀伝に、「(世祖)謂賀曰卿与朕源同、因事分姓、今可為源氏」とある(919頁)。
- (10) 『晋書』卷一二九、沮渠蒙遜載記。
- (11) 孟県人民文化館、尚振明「孟県出土北魏司馬悦墓誌」(『文物』1981年第12期)、45～46頁および図版肆。墓誌の録文は趙超『漢魏南北朝墓誌匯編』(天津古籍出版社、1992年)57～59頁を参照。
- (12) 朱亮主編『洛陽出土北魏墓誌選編』(科学出版社、2001年)。墓誌の録文は前掲『漢魏南北朝墓誌匯編』120～121頁を参照。
- (13) 河北省文管処(何直剛)「河北景県北魏高氏墓發掘簡報」(『文物』1979年第3期)、23頁。墓誌の録文は前掲『漢魏南北朝墓誌匯編』322～323頁を参照。
- (14) 『周書』卷一九、楊忠伝、317頁。『旧唐書』卷一、高祖本紀、1頁。

図版出典

- 図1 司馬金龍墓出土漆絵屏風
曾布川 寛・岡田 健編『世界美術全集 東洋編 3 三国・南北朝』(小学館、2000年)、96頁、図版75
- 図2 寧夏固原出土木棺漆絵
曾布川 寛・岡田 健編『世界美術全集 東洋編 3 三国・南北朝』(小学館、2000年)、94頁、図版73
- 図3 司馬金龍墓表
山西大同市博物館・山西省文物工作委員会「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」(『文物』1972年第3期)、27頁、図7
- 図4 司馬悦墓誌
孟県人民文化館、尚振明「孟県出土北魏司馬悦墓誌」(『文物』1981年第12期)、図版肆
- 図5 司馬顯姿墓誌
朱亮主編『洛陽出土北魏墓誌選編』(科学出版社、2001年)、293頁、図版79
- 図6 高雅墓誌(側面部分)
河北省文管処(何直剛)「河北景県北魏高氏墓發掘簡報」(『文物』1979年第3期)、23頁、図5

